

幼児期の食育と共食時の人間関係 (1)

— 兵庫県下の保育所における援助実態と課題 —

Shokuiku in Early Childhood Education and Social Interaction at Mealtimes (Part 1)

— The Status of School Lunchtimes at Day-Care Centers in Hyogo Prefecture, Japan —

今津屋 直 子 *

日 浦 直 美 **

Abstract

School lunchtimes are an appropriate setting for providing *shokuiku* (food, nutrition, and eating education), which aims to improve children's mental and physical growth and health. The purpose of this study was to clarify the status of school lunchtimes at day-care centers in Japan, and to consider what makes children enjoy their meals and what teachers do to educate children during lunchtime.

To do this, we administered a questionnaire to homeroom teachers of 5-year-old children at 919 day-care centers across Hyogo prefecture.

The survey results indicated that teachers, in response to questions about the content of *shokuiku* they provided at school lunchtimes, emphasized "health." However, teachers also reported that social interactions between children might be more important.

Teachers were aware of whether children were enjoying their meals by taking note of their eating companions, whether children were smiling, and topics of conversation between children. Notably, the factors related to interpersonal relationships appeared to make up much of what teachers considered a "happy meal" for children. The factors constituting teachers' notions of a "happy meal" might also be related to how they know whether each child is enjoying his or her meal.

From the results of this survey, we note the specific elements of teachers' attitudes towards children at lunchtimes.

キーワード：食育、保育所給食、共食

1. はじめに

2005年に食育基本法の施行、翌年の食育推進計画策定後、家庭、学校、保育所等における食育の進展等、食育は着実に推進され（第2次食育推進計画）、国民の間に「食育」が周知されるようになった。2011年には過去5年間の食育に関する取組の成果と反省を踏まえて、第2次推進計画が策定された。第2次推進計画（内閣府 2011）では、「周知から実践へ」をコンセプトに、食料の生産から消費等に至るまでの食に関する様々な体験活動や食育推進のための活動の実践（食育基本法第6条）を旨として、食育を国民のあいだに定着させていこうとしている。

第2次推進計画においては、食育の推進に関する

施策について基本的な方針に3つの重点課題が掲げられている。「生涯にわたるライフステージに応じた間断ない食育の推進」、「生活習慣病の予防及び改善につながる食育の推進」、「家庭における共食を通じた子どもへの食育の推進」である。

重点課題のうち「家庭における共食を通じた子どもへの食育の推進」は家族との共食への取組を促している。これは、家庭での共食の機会が少ないという課題が未だ改善されていないためである。保育所入所児童の家庭を対象にした調査においては、家庭では子どもを1人だけで、あるいは子どもだけで食べさせないような配慮をしている家庭の増加が報告されており（藤沢ら 2009）、子どもの心身の成長に家族との共食の機会が大切であることへの意識が高

* Naoko IMAZUYA 教育学部教授

** Naomi HIURA 教育学部教授

まってきたことがうかがえる。子どもにとって非家族との共食である保育所の給食については、同年代の仲間との食事は社会性の育ちや食べものの嗜好が広がる機会場として期待されている。保育所における食育については多くの実践報告のほか、給食の内容や子どもの朝食の摂取状況、食育活動の種類など食育全般について質問紙調査したもの（足立・中山 2006）がある。仲間との共食については、量的な調査を通して現状から課題を捉えるような報告は多くない。

給食時の保育者の支援については、進藤ら（2006）が食育実践に求められる保育者の資質と保育者養成の課題を検討しているが、調査対象が2つの保育所に限られている。保育所の給食の役割のひとつに子どもの社会性の育ちのように人間関係の観点からの取組が求められているにもかかわらず、その課題の把握が十分とはいえない。

第2次食育推進計画では、保育所における食育の推進の課題として、次の3点があげられている。「乳幼児の発育及び発達過程に応じて計画的な食事の提供や食育の実施に努めるとともに食に関わる環境への配慮をすること」「『保育所における食育に関する指針』の普及とその活用の促進」「保育所資源を活かして地域と連携しながら在宅子育て家庭への支援に努めること」である。

「保育所における食育に関する指針」は2004年に策定されて以来、保育所の食育推進の手引きとして浸透している。保育所指針にも、保育所の食育推進には『保育所における食育に関する指針』が明記されている。しかし、保育の現場では食育の計画づく

りに十分に指針を活用しているとはいえないことを酒井（2008）は示し、今津屋ら（2009）の調査結果においても同様であった。

「保育所における食育に関する指針」では、「食を営む力」の育成ための基礎を培うことを目標としているほか、楽しく食べる子どもの成長を目指している。楽しく食べるの「楽しく」とはどのような状況をさしているのか。この抽象的な表現は様々な解釈ができる、それ故、個々の保育所や保育者にとって「楽しく」の捉え方が異なり、食事時の援助にも影響を及ぼしていることが考えられる。

本研究の目的は、保育所における給食について、保育者の食育に関する意識と援助の実態より、保育者が人間関係の観点から給食時の支援を行っているか、保育者が「楽しく食べる」子どもの姿をどのように捉えているかを把握することである。

2. 方法

保育所での食育の現状を捉えるために、兵庫県下の認可保育所（919園）の5歳児クラス担当者を対象に、質問紙による実態調査を実施した（2009年8月～9月）。質問紙の回収率は48.9%、有効回答数449であった。回答者の属性は表1に示した。

質問紙で得られたデータについて信頼度95%のもとでそれぞれの選択肢の母比率の区間推定を行い比較した。選択肢間に有意な差が認められるかを確認することで保育所の「食育」に対する意識の特徴を検討した。なお、母比率の区間推定には以下の式を用いた。

表1 回答者の属性

設置者		所在地	
公立	43.2 (%)	市街地	38.6 (%)
民営	54.4	郊外の住宅地	35.5
無回答	2.4	農業・漁業・林業を営む家が多い地域	19.7
		無回答	6.2
園児数		記入者の勤続年数	
約60名	16.3 (%)	1年未満	1.2 (%)
60-90名	22.1	2-3年	9.8
90-120名	27.8	3-5年	15.6
120名以上	25.9	5-10年	20.4
無回答	7.9	10-20年	26.4
		20年以上	22.8
		無回答	3.8

各選択肢間の母比率の区間推定

$$P \pm Z \times \sqrt{P(100-P)/n}$$

$$Z = 1.96$$

$$n = \text{標本数}$$

$$P = \text{標本比率 (\%)}$$

給食の実施状況項目を検討する項目（食事開始、食事仲間、座席、留意点、献立説明、食事時間）と回答者の属性（勤続年数、保育所園児数、保育所所在地）との関係を検討するため、クロス集計（SPSSによるカイ二乗検定）を用いて分析した。

3. 結果および考察

保育所における食育に関する指針では、3歳以上児の食育のねらいおよび内容は「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「命の育ちと食」「料理と食」の項目別に示されている。子どもの活動内容は1つの項目に限られているものではなく、項目間で関連性をもたせながら、総合的に活動を展開していくことが求められている（厚生労働省 2004）。したがって、各食育活動には複数の観点からねらいをつけ、内容を考える必要がある。

本調査の結果より、保育所で展開されている食育活動の種類は、ほとんどの回答が給食、クッキング保育、食材の栽培、栄養教育の4つに集約された。よって、給食、クッキング保育、食材の栽培、栄養教育が主な食育活動であることがわかった。ここでは、家庭における食育の支援については含まれていない。

図1に、各食育活動において5つの観点をどの程

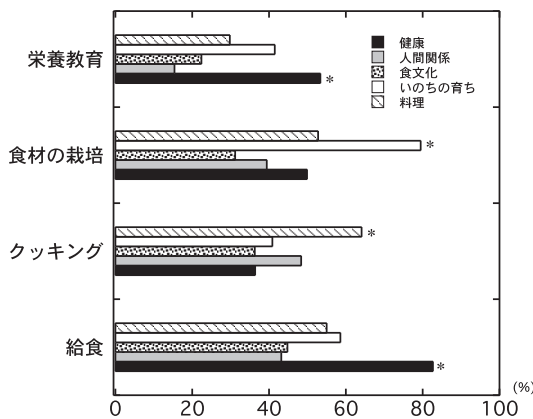


図1 各食育活動について非常に意識している観点

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

度意識して取り組んでいるのか尋ねた結果を示した。給食では「健康」、クッキングでは「料理」、食材の栽培では「いのちの育ち」、栄養教育では「健康」を「非常に意識している」という回答が多く、各観点の間に有意差が認められた。よって、各活動に対する「非常に意識している」が多かった観点は、各々の活動への取組の特徴を表していることが示唆された。

観点のうち、「人間関係」や「食文化」を「非常に意識している」という回答は他の観点到比ると少なかった。「人間関係」については、クッキングでは48.4%であり、他の活動に比べると多い傾向を示した。理由として、クッキングは、料理への関心や技能を身につけるほか、仲間との共同作業を通して人間関係を育む機会として期待されていることが考えられる。「食文化」は給食では44.8%と他の項目に比べると多い傾向にあった。これは、給食の献立に行事食や郷土料理を取り入れることによって給食を食文化の伝承の機会として捉えていることが考えられる。

観点として「人間関係」や「食文化」をあげる回答は多くはなかったが、給食においては、「人間関係」「食文化」は他の観点同様、いずれも40%を超えており他の食育活動に比べると多かった。給食は他の活動に比べると、食育の5つの観点を比較的設計しやすい、総合的な食育活動の場であると考えられる。給食はほぼ毎日実施されるため、繰り返されることに慣れてしまい、食育の機会としての重要性が薄れていくようなことは避けたい。給食を複数の観点をもって取り組む事のできる食育活動として捉えること、給食には日々の積み重ねによって得られる成果を期待できることを保育所や保育者は十分認識すべきである。

給食の実施状況を図2に示した。通常の食事場所は、保育室が多く（77.7%）、配膳は保育士（78.7%）によって行われているところが多かった。食事の開始は、一斉に始めるところ（85.9%）が、子ども達の個々の状態に合わせて始めるに比べて多く、一緒に食事をするのはクラスごと（69.5%）のところが多かった。

食事の際の座席は、固定席（40.8%）に比べて固定されない不定の席（49.4%）が多く、なかでも子ども達が自由に席を選ぶところが多くみられた。保育者が座席を決める際には、仲間関係を重視してい

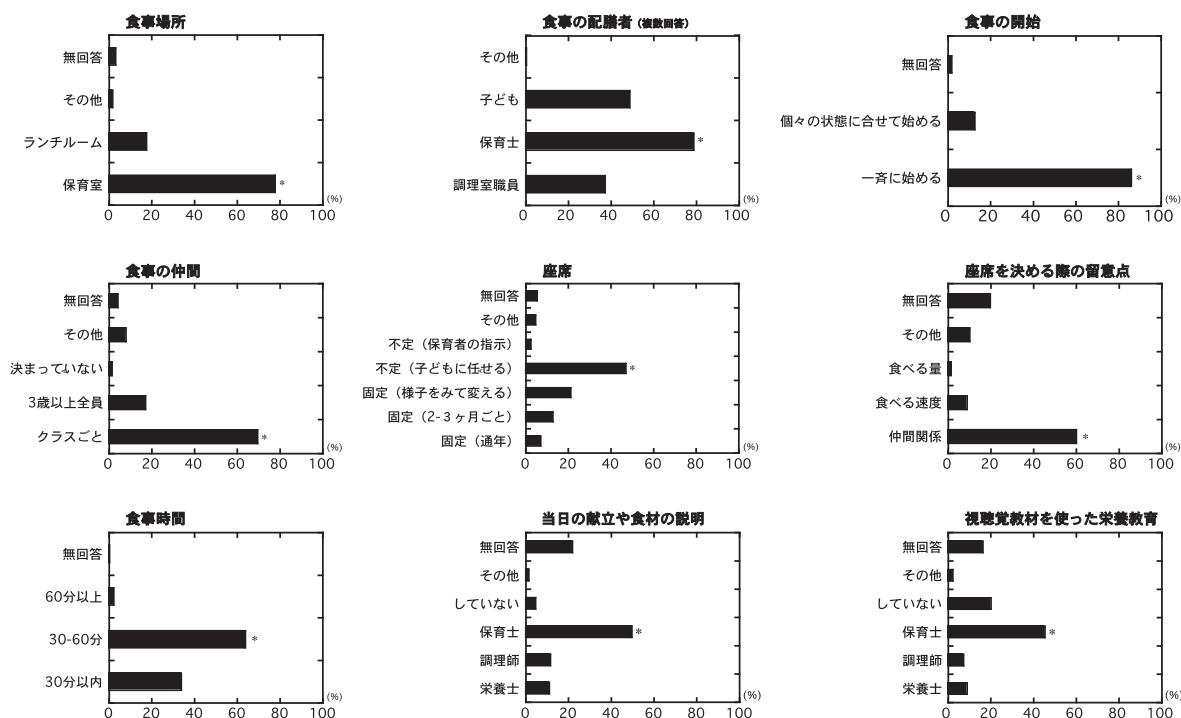


図2 給食の実施状況

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

る(60.0%)という回答が最も多かった。

昼食時間は30-60分が最も多く(63.8%)、食事を始める前に献立や使われている食材について説明をしているのは保育士が最も多く(49.6%)、視聴覚教材を使った栄養教育も栄養士や調理師に比べて保育士(45.3%)が多かった。

給食の実施状況について各項目間や、回答者の属性との関係を検討するため、クロス集計を行った。また、それらのクロス集計にカイ二乗検定を行なった結果、5%水準において関係性が認められたのは、食事仲間と保育所所在地・園児数・食事場所・食事開始、座席と食事場所、食事開始と保育所所在地・食事時間であった。食事の開始の仕方では、「一斉に始める」が「個々の状態にあわせて食事始める」より多かった。多くの保育所では全員揃って「いただきます」と食前の感謝をしてから食事を開始していることが予想できる。数は少ないが、子どもの状態に合わせて食事を開始している保育所もあった。これは、個々の子どもによって朝食をとった時刻が異なり、昼食までのお腹のすき具合も異なるため、昼食の開始時刻を個々の子どもの状態に合わせて、食欲がでてくるのを待つためである。その方が、子どもの食べたい気持ちを引き出し、食欲増進につなげようとの配慮からである。しかし、個々の状態に

あわせて食事を始めるグループの方が一斉に始めたグループの方よりも、食事時間60分以上の割合が多かった。個々に始めるほうが食欲にあわせて食事が進んでいるとはいえず、ダラダラ食べている可能性も推察される。個々の子どもの生体リズムを重視した試みではあるが、その評価をし検証することも必要である。食事仲間と園児数については、園児数の多い保育所の方がクラスごとに食べていた。

表2~4に、食事前、食事中、食事後の保育者の配慮の有無について尋ねた結果を示した。

「非常に認識している」という回答数と、「やや認識している」という回答数の合計より、全ての配慮事項において保育者は認識していることがわかった。うち、「非常に認識している」という回答が70%以上だったのは、「食事前は衛生面の注意」、「食事に特別な配慮がある子への対応」、食事中は「食事への感謝の気持ち」、「マナー」、「食事に特別な配慮がある子への対応」、食事後は「食事への感謝の気持ち」、であった。進藤らの調査(2006)においても食事援助、食品衛生に対する保育者の意識が高い傾向にあり、健康やいのちに関わることは配慮事項のなかでも優先順位が高いことがわかった。

給食時の仲間関係について、給食時は仲間関係を育む時間だと思いか尋ねたところ、非常に思うが

表2 食事前、食事中、食事後の保育者の配慮

配慮事項	非常にしている	ややしている	あまりしていない	全くしていない	無回答
保育の流れ	34.3 (%)	49.9 (%)	8.6 (%)	0 (%)	7.2 (%)
衛生面 (手洗い・うがい) の注意	91.6	5.3	0.2	0	2.9
場所の雰囲気づくり	26.9	64.0	6.2	0	2.9
子どもの精神面	48.0	47.7	1.2	0	3.1
栄養指導	35.7	54.2	7.0	0	3.1
食事に特別な配慮がいる子への対応	86.8	6.2	0.7	0.7	5.5

表3 食事中の保育者の配慮

配慮事項	非常にしている	ややしている	あまりしていない	全くしていない	無回答
食事への感謝の気持ち	82.5 (%)	14.1 (%)	0.7 (%)	0 (%)	2.6 (%)
マナー	83.7	13.7	0	0	2.6
食事に特別な配慮がいる子への対応	82.3	10.1	1.7	1.0	5.0
栄養指導	37.4	53.2	6.7	0	2.6
好き嫌いについての個別指導	51.8	44.8	0.7	0	2.6
時間内に食べ終えるよう促すこと	62.4	33.8	1.0	0	2.9
食の細かい子を励ますこと	54.4	41.0	1.0	0	3.6
静かに食べること	13.2	67.9	14.6	1.0	3.4
子どもが仲間との会話を楽しむこと	27.8	64.0	4.3	0.2	3.6
食事環境への配慮	39.1	52.0	4.6	0	4.3
栄養士・調理師との触れ合い	23.5	53.5	18.0	1.2	3.8
後片付けの仕方を伝えること	60.0	35.5	1.4	0	3.1
食事後の行動について伝えること	50.8	42.4	3.6	0	3.1
次の活動の導入	29.7	51.1	12.5	0.7	6.0

表4 食事後の保育者の配慮

配慮事項	非常にしている	ややしている	あまりしていない	全くしていない	無回答
食事に対する感謝	76.0 (%)	19.9 (%)	1.0 (%)	0 (%)	3.1 (%)
後片付けの具体的な指導	67.6	28.5	0.7	0	3.1
食事のマナー等を伝え一緒に考える	54.0	38.8	3.6	0.2	3.4
食事と他の活動との関連性	29.5	54.7	10.6	0.5	4.8
歯磨・うがい・手洗い等を伝えること	65.9	27.6	2.4	0.2	3.8

52.8%、やや思うが42.9%であった (図3)。多くの保育者は給食時を子どもの仲間関係を育む時間だと捉えていることがわかった。さらに、給食の時間を子どもの仲間関係を育むために意識的に利用しているか尋ねたところ、「ある」の70.5%と「ない」の28.1%の間に有意差が認められた。多くの保育者が給食の時間を子どもの仲間関係を育むために意識的に利用していることがわかった (図4)。

給食では「人間関係」の観点への意識は高くなかったこと (図1)、給食の座席は不定席 (子どもに任せる) が多かったこと (図2) から、多くの保育者が給食の時間を子どもの仲間関係を育むために意識的に利用していることを推察することは難しい。食事中の保育者の配慮 (表3) について、静か

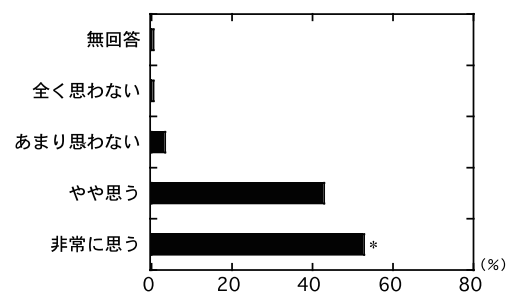


図3 給食は子どもの仲間関係を育む時間になっていると思うか

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

に食べることや子どもが仲間との会話を楽しむことに対する配慮は、ややしているという回答が、非常にしているよりも多かった。給食時は仲間関係を育

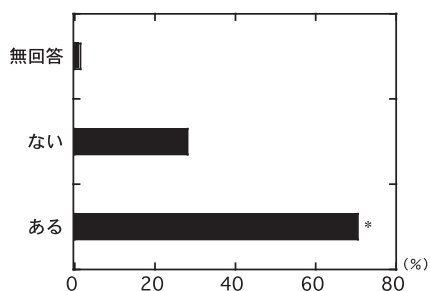


図4 子どもの仲間関係を育むために給食の時間を意識的に利用することがあるか

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

む時間であり、給食の時間を子どもの仲間関係を育むために意識的に利用していると多くの保育者は思っている。実際には食育活動の計画に人間関係の観点からねらいや内容が定められていないことが考えられる。一方、給食の座席について2-3カ月ごとに変えたり、様子を見ながら座席をかえる保育者もいることから、給食を人間関係の観点から取り組んでいる様子もうかがえる。給食の座席を決める際に、子どもの仲間関係や喫食状態へ配慮することによって、仲間関係が構築できたり、仲間同士が影響し合っってよい食べ方が身につくことが期待できる。

今村(2008)は給食時における幼稚園教諭の発話分析から、給食中の日常会話(食事に関する以外)が少なく、給食中に保育者が子どもと関係を築くことがそれほど意識されていないことを指摘している。人間関係の観点からの取組には、言葉かけによる援助もある。今回は言葉かけに関する質問項目は少なかった。援助の実態は質問紙調査だけではつかめないこともあるため、観察による研究も併せて必要である。

食と関連した子どもの状況について保育者がどの程度認識しているか尋ねた結果を表5に示した。5つの質問項目は、高橋(2004)が「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」(厚

生労働省 2004)を参考にしたものである。「食事前に空腹感がある」「よく噛んで味わって食べている」「一緒に食べるのを楽しんでいる」「家庭での食事の手伝いをしている」「食べもの等に興味を持ち話をする」の全ての項目において、非常に認識しているという回答数と、やや認識しているという回答数の合計は、「あまりしていない」と「全くしていない」の合計に比べて多かった。うち、「非常に認識している」が多かったのは、「一緒に食べるのを楽しんでいる」であり、「ややしている」との間に有意差が認められた。仲間と一緒に食事を楽しむ子どもの様子は、保育者により認識されていることが示唆された。高橋の調査結果(2004)においても「一緒に食べるのを楽しんでいる」が最も認識されていたが、高橋は子どもにとっての食事の楽しさをどこで認識したのか疑問を呈している。

図5には、子どものどのような様子を「食事を楽しんでいる」と思っているか尋ねた結果を示した。「仲間と味わって食べる」「笑顔で食べる」「食べもののことを話題にしている」様子について、「非常に思う」と回答した者が多く、「やや思う」との間に有意差が認められた。「仲間」「笑顔」「話題(会話)」に関する子どもの様子を保育者は「食事を楽しんでいる」と捉えていることが推察できた。

「やや思う」や「あまり思わない」が多かったのは、子どもが「集中して食べる」「たくさん食べる」「独りで味わって食べる」「早く食べる」様子であった。子どもが食事を楽しむ様子は多様である。他者との関わりから発生する「仲間」「笑顔」「話題(会話)」にみる楽しさ以外の楽しむ様子を、楽しいと認識するのは難しいことがわかった。さらに、子ども自身の楽しさと、保育者自身が考える楽しさが必ずしも一致していない可能性を示唆している。

高橋(2004)は、子どもの食事場面の食事行動を観察し、子どもにとっての楽しさを「笑い」の表情

表5 食と関連した子どもの状況に対する保育者の認識

配慮事項 ¹⁾	非常にしている (%)	ややしている (%)	あまりしていない (%)	全くしていない (%)	無回答 (%)
食事前に空腹感がある	34.8	59.2*	5.0	0.2	0.7
よく噛んで味わって食べている	30.9	62.6*	5.8	0	0.7
一緒に食べるのを楽しんでいる	62.6*	36.2	0.5	0	0.7
家庭で食事の手伝いをしている	10.8	59.5*	27.8	1.2	0.7
食べもの等に興味を持ち話をする	28.3	60.2*	10.6	0	1.0

¹⁾ 高橋(2005)

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

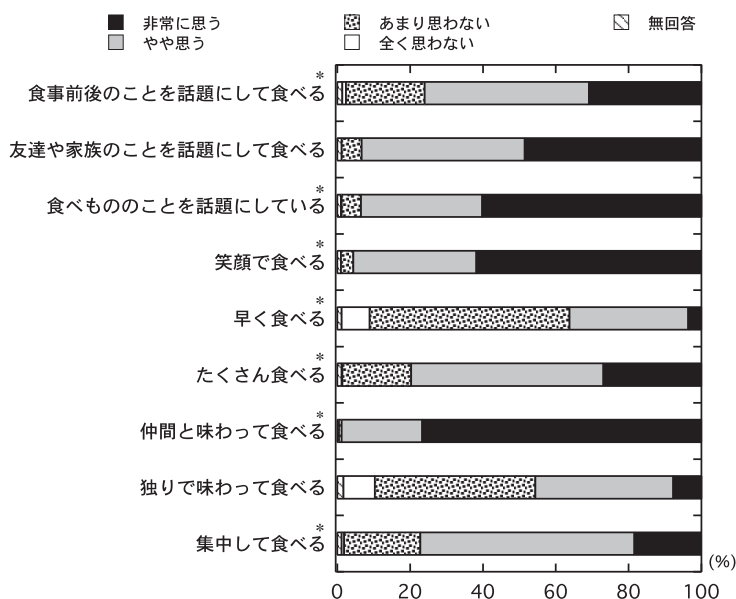


図5 保育者からみた食事を楽しんでいる様子

* 信頼度95%の下で母比率の区間推定を行い比較した結果2番目に割合の高かった選択肢との間に有意差が認められたもの

からよみとった。その結果4歳児後半から5歳児前半にかけて「楽しさ」とは仲間同士でのおかしさや面白さ、会話の共有が影響していること、言葉の発達に伴いとばけ、ふざげといった遊び食べを通して、食べながら会話の内容を楽しむことができるようになり、グループ全体の会話を弾ませ、共感を共有しながら食事をするのが楽しさを誘発することを示唆している。

凝地(2008)は3歳児の食事行動の観察から、食事の前後は友だちと話す、食事中は集中していることが多く、仲間と話しながら食べる楽しさだけでなく、自分自身が食べ終わったことに満足し、嬉しそうな表情をみせることを読みとった。さらに楽しく食べる姿を笑顔だけでなく、食べものへの集中力や満足感、仲間との会話や独り言も含めて総合的に、食事を楽しんでいるかどうか判断した。楽しんでいると判断をしたケースでは、給食にかかった時間は30分前後だったことから、楽しさと食事の所要時間についても関係があることを示唆している。

子どもにとって「楽しさ」の要素は他者との交流にかかわらず多様である。しかし、先の結果(図5)が示唆しているように、人間関係の視点で楽しさを判断している保育者が多いのは何故なのか。その理由を探るために、保育者自身は「食事を楽しむ」ということをどのように捉えているのかを把握することを試みた。保育者に「楽しい食事」を表すキー

ワードを尋ねた。その結果を内容によって分類すると、「人間関係」「感覚」「環境」「献立・メニュー」「食事の仕方」「興味・関心」の6つのカテゴリーに分けることができた(表6)。中でも、「人間関係」に関するものが最も多く、多い順に、「会話」「一緒に食べる人(仲間・家族)」「仲間・友達」、「笑顔」であった(図6)。これは、保育者からみた「食事を楽しんでいる」子どもの様子を捉える視点と重なっているように思われる。保育者が考える楽しい食事のキーワードのうち、「人間関係」カテゴリーに分類されたキーワードは、保育者が子どもたちの仲間関係を育むために、給食時をいかに利用し、どのような具体的援助を行っているかを考える上で示唆的である。

「保育所における食育に関する指針」には楽しく食べる子どもについて次のように示している。「楽しく食べる子どもに成長していくことを期待しつつ次の5つの子ども像の実現をめざして行う。①お腹がすくりズムのもてる子ども②食べたいもの、好きなものが増える子ども③一緒に食べたい人がいる子ども④食事づくり、準備にかかわる子ども⑤食べものを話題にする子ども」。しかし、「楽しく食べる」の具体的な記述はなく分かりにくい。そこで、「保育所における食育の計画づくりのガイド」(こども未来財団2007)を参照すると、「5つの子ども像は個々にあるのではなくそれぞれが互いに影響し合い

表6 保育者が考える「楽しい食事」を表すキーワードの分類

人間関係	人間・仲間関係, 仲間・友達, 家族, 一緒に食べる人, 共感してくれる人, 温かい保育士, 保育者のまなざし, 一緒に食べる, 分かち合う, 仲良く, 団らん, 笑顔, 会話, 話題, おいしさを共感する, あいさつして食事をする, 思いやり, 感謝
感覚	おいしい あたたかい うれしい (喜び) ぬくもり・あたたかさ 空腹感 満足感・満腹感 達成感, 安心感 気持ちの安定 明るい きれい におい・かおり 味・味わう 彩り 盛りつけ・見た目
環境	雰囲気, 場所・安心な場所, ゆったりとした時間, 怒る声のしない保育室, 明るい食卓, 安全, 清潔感, テーブルの位置, テーブルセッティング, 食器の種類, リラックス, 自分のペース, 音楽
献立	献立・メニュー, 旬・季節感, バランス, バイキング, 素材・食材, デザート, 好きなもの量, 品数, 調理法
食べ方	マナー, よく噛んで食べる, 落ち着いて食べる, 集中して食べる, 好き嫌いをなく食べる, 保育者も同じものを食べる, 姿勢
興味・関心	食べものへの興味, 食材を知る, 栽培物を食べる, 作ったものを食べる

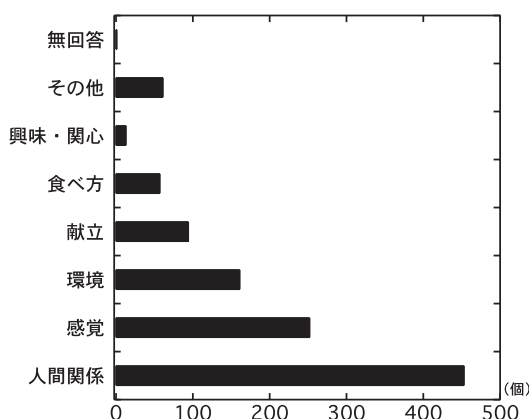


図6 保育者が楽しい食事のイメージとしてあげたキーワード

ながら統合されて一人の子どもとして成長していくことを目標としている」と記載されている。

期待されている「楽しく食べる子ども」とは、先述の5つの子ども像と重なるのである。食べものや食べ方に関わる行為や興味や考え方を含めてそこに主体的に関わるような子どもの姿なのである。したがって「楽しく食べる」には、他者との交流から生じる楽しさ以外にも、複数の要素が含まれている。「楽しく食べる」には重要な意味がこめられているにも関わらず、「楽しく」という意味への理解を深めないで、感覚的で、抽象的に捉えたまま援助にあたっているかもしれない。加えて個々の保育者によって「楽しく食べる」の捉え方が異なってしまう可能性も含んでおり、保育者間で異なる食事の援助をしていることも推察できる。

実際、保育者は子どもの仲間関係を育む上で、給食の時間をいかに利用し、どのような具体的援助を行っているのか。今後は給食時の保育者の支援について、観察を通して実態を捉え、どのような指標を

もって子どもの共食時の指導・援助を行えばよいのか、それらの問いに答えることを課題としたい。

本研究の質問紙調査にご協力を賜りました兵庫県の保育所の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究は、関西学院大学2009年度教育研究活性化資金「基礎的な研究」によって遂行しました。さらに平成22年度(2010年度)科学研究費補助金(基盤 C22530889)によって研究を継続することができました。ここに謝意を表します。

引用・参考文献

- 足立恵子・中山玲子(2006) 幼児の食育推進に関する一考察—幼稚園と保育所の給食の観点から—, 食物学会誌, 61, 21-27
- 今津屋直子・日浦直美(2010) 共食時の保育者の援助と子どもの人間関係, 日本家政学会第62回大会要旨集, 37
- 今村光章(2008) 給食時における幼稚園教諭の発話分析, 岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究, 10, 125-134
- 厚生労働省(2004) 「保育所における食育に関する指針」
- 凝地佐知(2008) 食卓で育つ子どもたち, 聖和大学卒業研究論文
- 子ども未来財団(2007) 「保育所における食育の計画づくりのガイド」
- 酒井治子(2008) 保育所における食育の計画づくりの状況と課題, 「保育所における食育に関する調査報告書 保育所食育実践集Ⅲ」, (社)日本保育協会, 225-263
- 進藤容子・原口富美子(2006) 食育実践に求められる保育者の資質と保育者の養成課題(1), 湊川短期大学紀要, 42, 7-14
- 高橋美保(2005) 笑いにみる子どもにとっての楽しい食事, 白鷗大学論集 1(1), 61-74
- 内閣府(2011) 「第2次食育推進計画」
- 藤沢良知・巷野悟郎・酒井治子・高橋保子・豊永せつ子・太田百合子(2008) 「保育所における食育に関する調査報告書」, (社)日本保育協会